

乳児の情動調整とわらべうたとの関係性
— 他者関係の発達に課題があった乳児の経時的検討 —

本岡美保子¹・七木田 敦²

Relationship Between Baby's Emotion Regulation and *Warabe-uta*
— Baby's issue with the development of other relationships —

Mihoko MOTOOKA¹, Atsushi NANAKIDA²

Abstract: This study aims to show the relationship between emotion regulation and *Warabe-uta*, also to consider the knowledge of childcare by focusing on baby's positive emotion. *Warabe-uta* is a Japanese traditional children's play song. Nursery teachers often sing *Warabe-uta* for baby's in order to regulate their emotion. Some research considered the value of *Warabe-uta* as a music teaching material. However, a few studies investigated the relationship between *Warabe-uta* and emotion regulation. In this study, therefore, I analyzed positive emotion regulation of a baby who has problem in relationship with others through 4scenes by singing a *Warabe-uta*. As a result, I found that, *Warabe-uta* effect baby's "intentionality" "embodiment" "responsiveness", and also on nursery teacher's "intentionality" "embodiment" "nursing characteristic". It prompts a positive emotion regulation in baby. This result might have positive effect on inter-subjective connection, but in contrary, it might make baby to be dependent on her own nursery teacher. It is interpreted from this study that relationship between emotion regulation and *Warabe-uta* is close. It is important that nursery teacher work to cooperate for baby's development.

Key words: Emotion Regulation, *Warabe-uta*, Baby, Development, Relationship

問題と目的

乳児保育の利用率は、近年、増加の一途をたどっている（厚生労働省 2012～2017）。乳児期は発達が飛躍的に進むため、保育所保育指針においてより積極的に位置づける必要がある（厚生労働省 2016）ことから、平成30年度改訂版では、乳児保育に関して詳細な記載がなされた。しかし、実際の保育場面での研究はそれに反して蓄積は多いとは言えず、乳児の発達に及ぼす保育の質との関連の研究等が求められている（野澤ら 2016）。

このような乳児保育において、これまで我が国で伝統的に実践されてきたものの1つに、わらべうたがある。民族音楽の1つであるわらべ

うたは、言語と情動と遊びとが一体となっており、言語獲得や身体、情動の発達に効果があると考えられてきた（小泉 1986、園部 1975、須川 1975）。乳児が、音程やリズムによって身体をリラックスさせる（嶋田 2012）ことから、保育実践に広く受け入れられてきた（木村ら 2009）のである。加藤（2007）は、乳児と保育者との間にわらべうたやあやし遊びといった「文化（財）」を間に挟むことで、心地よさ・面白さが乳児の身体に刻まれ、「共感的知性」が育まれると述べている。わらべうたは、リズムや拍感、身体の接触、遊びや体の動きなど様々な身体性を伴っており、多面的であるため、その効果について実証的に研究したものは少ない。研究の多くは、乳児保育実践において気持ちの安定や安らぎのために経験的に語られたもの（正代 2011など）がほとんどで、わらべう

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院教育学研究科

た実践において、うたう者と聞き手との間に生起する心の動きや、情動の安定などについて、実証的に研究されてはこなかったのである。

乳児の情動調整は、生活をともにする人との基本的信頼感や情緒的な交流を基盤とした関係性の中で発達する（小山 2006）。情動とは、「内側で感じているだけでなく外に向けて強く押し出され、結果的に何らかの動作や行為にいたるプロセス」（遠藤 2013）のことであり、調整とは、「情動状態をもたらす身体を調整して、関係を調和させるもの」（須田 2017）である。乳児期は自己調整への移行の段階であるため、調整には養育者の介入が必要（星 2003）であり、保育者との関係や支援が重要な役割を果たす（森田 2004）と考えられるが、情動調整に対する保育者の関わりについて検討した研究は少なく（森野 2012）、わらべうたとの関係性を明確に示した研究もない。

情動調整に対する保育者の関わりについては、0歳児の泣きに関する研究によって、1対1で快の経験を共有することが大切であること（佐々本 2016）、個別的で応答的な対応を基盤とする保育とそれを可能にする保育者の力量や連携の必要があること（清永ら 2017）は示されたが、1歳以上児の個別事例の検討は不十分であり、快情動に関する検討も少なかった。このことから、1歳以上児も含めた快情動の創出場面に着目し、個別事例に焦点を当てるといふ研究の余地があるといえるだろう。

また鯨岡（1999）は、乳児との関係を結びながら情動を把握するには、漠然と子どもに向けていた関心を子どもとの関係の中に凝縮させ、保育者の気持ちを「成り込」ませることによって子どもの「生」を追体験するような間主観的把握が重要であると述べ、客観主義パラダイムからの転換が必要（鯨岡 2013）であると主張している。そこで本研究では、鯨岡（1999など）に依拠した間主観的把握をもとに、わらべうたと情動調整との関係性がどのようなものであるのかということ、他者関係の発達に課題があった乳児の、快情動の創出という視点から示したいと考える。

なお間主観的とは、『『あなた』の主観のある状態が『あなた』と『私』の『あいだ』を通して『私』の主観の中に伝わってくること』（鯨岡 2006）である。また本研究における乳児とは、「低年齢児保育にあたる0歳児及び3歳未満児保育における子ども」（野澤ら 2016）とする。さら

に本研究におけるわらべうたととは、「乳児に対して行う動きや遊びなどの関わりのうち、動きや遊びに即したりリズムや拍感と、母語に根ざした抑揚もしくは旋律が伴った関わり」とし、うたうとは「ともに鳴り響き共鳴すること、通じ合うこと、伝えること」（やまだ 2010）とする。

対象と方法

1. 研究対象

研究対象は、A市B子ども園で保育を受ける1歳児クラスの乳児ゆうみと、保育者である「私」である。ゆうみを研究対象にしたのは、ゆうみの入園にあたり、母親から相談を受けていたからである。その内容は、ゆうみが母親以外の人になつくことがないこと、1歳半検診で発達障害（自閉症スペクトラム）の可能性を指摘されたことであった。他者関係に課題があると考えられるゆうみに対して、快情動の表出を促すようなわらべうたの関わりを続けることによって、ゆうみの情動調整や他者関係がどのように発達していくかを捉えることは、本研究の目的に合致すると判断し、研究対象児とした。ゆうみが在籍し、「私」が保育者として勤務していたB園の乳児保育は、幼稚園であったB園が子ども園になってから始まり、その歴史は10年に満たなかった。この当時、1歳児は14名在籍し、2人の担任と4～5人の補助保育者で保育をしていた。ゆるやかな担当制という名の下に、月齢ごとに乳児を2つのグループに分け、1つのグループを、担任1人と補助保育者の2人～3人で担当していた。そして、2、3週間ごとに担任だけを入れ替えるという形で、保育をしていた。

研究対象者であり、筆者でもある「私」は、この時は補助保育者として午前中のみ勤務しており、月齢の低い子を担当していた。ゆうみは関与観察の当初、月齢の高い子のグループにいた。

2. 観察期間

20XX年4月～20XX+1年3月である。母子分離等、乳児の情動の波が激しいと思われる、早朝から午睡までの時間帯に、関与観察をした。

3. 倫理的配慮

本研究にあたっては、B園の園長ならびに職員に了解を得た上で、乳児を預けている保護者にも文書にて研究の了承を得た。ゆうみの母親には直接、研究の意図及び、研究発表に関する説明をした。母親から同意を得た上で、連絡ノー

トの提供等の協力をしていただいた。また、本文中の名前はプライバシーに配慮し、すべて仮名である。本人が特定されることがないように月齢は伏せ、研究に直接関連がない範囲で、一部、性別等を改変した。

4. 研究方法

研究方法は、鯨岡（2005, 2006, 2013）に依拠した関与観察及びエピソード記述、エピソード記述の分析と考察を行った。このような方法をとったのは、これまでの客観主義パラダイムからの転換が必要であると考えたからである。なぜなら、教育の具体的な営みは、一般化によってこぼれ落ちてしまう出来事の中にこそ展開しており、客観的な見方では子どもの他者関係を研究することにはならない（中田 2013）からである。観察者を研究対象の外側におくという客観主義に基づいたこれまでの自然観察では、乳児の行動として表れた情動表出を記述することはできたとしても、乳児自身が心でとらえた情動体験としての事実を記述することはできない。わらべうたによる乳児の情動的体験を捉えるには、そこに関与した保育者が間主観的に把握することによって初めて可能になると考える。そこで本研究では、鯨岡（2005, 2006, 2013）による関与観察とエピソード記述を採用した。

関与観察の内容は、背景と考察を加えた形でその日のうちに速やかに書き記し、不明確な点があった場合は動画にて確認をした。こうして収集した38のエピソードを、〈背景〉〈エピソード〉〈メタ観察〉から成り立つエピソード記述として、加筆・修正した。そのうち、快情動への調整エピソードを選び出し、わらべうたと情動調整との関係性が現れたエピソードを抜き出した。

さらにエピソード記述を、「私」の主観性として確立したものにすする為には筆者の経験から一旦切り離し、約1年後に間主観的な分析を行った。間主観的な分析とは、「『成り込み』=『情動

の舌の概念図』」（鯨岡 1999など）を援用した図を用いながら、エピソード記述に描かれた乳児と、保育者である「私」の主観に、筆者が「成り込」むように分析したものである。間主観的に分からないことも含みながら受け止めることが関係の展開には重要なため（鯨岡 2006）、間主観的に把握していない場合も含めて記述し、分析した。

5. 分析の視点

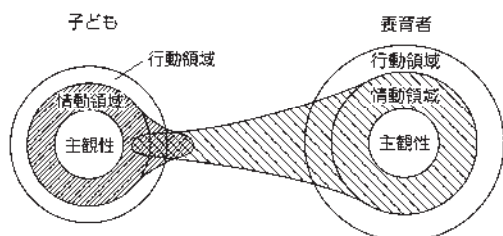
鯨岡（2006）は、「ゆったりとした構えのなかに、間主観的に繋がる局面が時折現れると考えるべき」と述べ、間主観的な局面は、自然に生まれてくるものであるとした。そして、間主観的に感じるための条件として、子どもを主体として関わり共に生きようとする志向性と、身体を通して感じる身体性をあげている。しかし、間主観的に分かろうとする時の、「私」と乳児との間に立ち現れている互いの主観性は、志向性と身体性だけでは説明できないだろう。なぜなら、現実の乳児と保育者はそれぞれ、その時々様々な主観を抱き、それを受け止める感受性の働きにより、互いの関係性が保たれているからである。

本研究では、それぞれの心に抱かれる主観性の中でも、乳児と保育者との間に立ち現れて互いの関係性に関与する主観性を対象にしたいと考えた為、鯨岡（2006, 2013）だけではなく、中田（2013）須田（2017）にも依拠し、志向性、身体性、応答性、共感性、養護性の5つの視点をもとに分析することを試みた。

以下は、それぞれの概念の定義である。志向性は鯨岡（2006, 2013）に依拠し、「相手を主体として受け止め、共に生きようと相手に気持ちを持ち出すこと」と定義した。身体性は中田（2013）に依拠し、「外の状況と一体となって感知し、感知していることを、身体を使って表出すること」と定義した。応答性は中田（2013）と須田（2017）に依拠し、「身体の共鳴を伴いながら、他者の行為を豊かにおぎなおうとすること」と定義した。共感性は中田（2013）に依拠し、「他者と共に意志し心から応えようとする」と定義した。養護性は須田（2017）に依拠し、「慈しみ保護しようとする」と定義した。

結果と考察

ゆうみのエピソード記述全38のうち、情動調整や他者関係の変容が分かるエピソード記述4つを選んで分析し、考察した。



「『成り込み』=『情動の舌の概念図』」（鯨岡1999など）

1-1. 「わらべうたへの反応」のエピソード記述

【エピソード No.1 「わらべうたへの反応」

20XX 年 6 月 29 日 10 時頃～ 約 10 分間

〈背景〉

ゆうみは、1 歳児クラスに在籍する女児である。母以外の人に対して心を開けず、1 歳半検診では要観察と言われていた。再検査をした医師から母は、自閉症スペクトラムの症状に近いものがあると言われたとっており、半年後に再検査をすることになっていた。4 月に入園してから表情が薄く、パズルや型はめなど、完成したことがわかりやすい遊びを好み、一人で遊んでいることが多かった。そのため保育者たちは、登園時に泣いても、ずっと抱っこをするというようなことはなく、おもちゃの所に連れて行ってその場を離れることが多かった。その方が、ゆうみは早く落ち着くからである。担任保育者だったえみは、そんなゆうみに対し、みんなと同じように行動させようとはしなかった。無理に集団行動をさせるのではなく、緩やかに集団へ適応させようと考えていたようである。しかし、集中しているときに他の行動を促すとゆうみの機嫌が悪くなることや、5 月入園の子もいる中、普段はおとなしく遊んでいるゆうみにまで目がいかないという事情もあったのではないと思われる。そのためゆうみは、おやつや給食になっても遊び続けていることが度々あった。私自身も、ゆうみは人と接することが苦手だから、そっとしておいた方がいいと思いついていた。

ところが 6 月に入り、ゆうみに対する私の認識を変えた出来事があった。月齢の低い子たちをお昼寝させていた時のことである。その少しはなれた場所で、ゆうみが積み木で遊んでいた。するとゆうみが突然こちらを振り返り、「うーうー」という声を出したのである。見ると、積み木が何段も上手に積み上げられていた。ゆうみが賞賛を期待するような態度をとるのは初めてだったので驚き、「よかったね、積み木ができたね」と私も一緒に喜んだ。ゆうみの登園時間が遅いことや、私が月齢の低い子を担当していたこともあり、これまで接する機会は少なかった。しかしこの出来事をきっかけに、ゆうみは人を求めているのかもしれない、ただ、その気持ちを表すのがあまり得意ではないだけなのではないか、と思うようになった。

この日も大きな泣き声で登園したゆうみ。私

はそのとき別の子に関わっており、ゆうみの受け入れには、関わっていなかった。

〈観察対象〉

ゆうみ（女児）じゅんや（男児）はると（男児）

私（補助保育者）

〈エピソード〉

朝のおやつの後、お部屋遊びの時間のことだった。冷暖房の装置を挟んで向こう側から、はるとが、私とじゅんやを呼ぶような声を出していた。冷暖房の装置には間に隙間があり、その隙間から、手も出していたはると。それに気づいたじゅんやも、こちら側から手を差し伸べた。すると、その隙間からはるとの笑顔が見えたので、私は「イナイ イナイ バア」とうたいかけ、隙間から顔をのぞかせてみた。はるとは小さな笑い声をあげ、私も笑った。そのときふと、冷暖房の装置とは L 字の向きにおいてある、低いおもちゃの棚のところから、ゆうみが不思議そうにこちらを見ていたことに気付いた。おもちゃを持ったまま、手は止まっている。私はそんなゆうみに対して、同じことをしてみたいと思った。棚の陰に隠れて、「イナイ イナイ バア」とうたいかけ、ゆうみを見ると、ゆうみはにこーっというような、ひっそりとした笑顔を見せた。そのまま続けて、うたいかけては顔を出すことを繰り返してみた。じゅんやも私を真似て、一緒にゆうみにやって見せていた。顔を出すたびに静かに笑顔を見せてくれたゆうみ。そのやり取りは何回か続いたが、しばらくするとまたひとり、フェルト落しの遊びに戻ったゆうみだった。

〈メタ観察〉

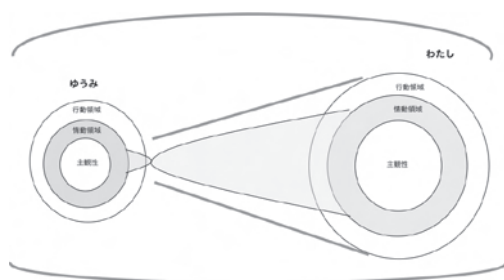
わらべうたは、うたいかけられた子どもだけではなく、まわりにいた子どもにも情動的な影響を与えるからこそ、ゆうみは「イナイ イナイ バア」に反応を示していたのではないだろうか。しかし、自分にもしてほしいというまでの感じはなかった。そう思っていたのかもしれないが、私には感じ取れなかったのである。おそらくゆうみにとって、自分の思いを表情や態度で示すことは難しいことなのだろう。ゆうみが見ていたことに私は気づき、してあげたいという一方的な思いでうたいかけたが、それに対してゆうみがうれしそうに反応を示したことで、ますますやってあげたいという気持ちになった。

ゆうみのように自分の感情を表出することが苦手な子どもにとっては、保育者が働きかけて

情動を引き出すことも大切なのではないだろうか。ゆうみの人との関わりに対する困難さを、わらべうたをうたいかけることによって乗り越えることができるのではないだろうか。

1-2. 分析と考察

はるとへの「イナイ イナイ バア」に、ゆうみが反応したのは、ゆうみの身体性がけっして閉じられたものではなく、はるとの情動やその場の雰囲気をも感じ取ることができるものであることを示している。しかし、感じ取ったことを、身体を通して表出するというところにまで至っていないために、快情動の表出が控えめなのであろう。つまり、ゆうみの他者関係の課題の1つは、身体を通して快情動を表出することであるだろう。「私」は、そんなゆうみに対してわらべうたをすることが、ゆうみの他者関係の発達及び情動調整の発達を促すのではないかと考えたのである。そこには、ゆうみの成長を信じ支えたいという養護性が働いていた。さらにこのときの「私」には、ゆうみのことを分かりたい、感情を引き出したいという志向性と、ゆうみの身体性を感じとりたいという身体性が現れていたといえるだろう。



ゆうみ：身体性

私：志向性・身体性・養護性

図1 「イナイ イナイ バア」をしたとき『『成り込み』=『情動の舌の概念図』(鯨岡1999)を援用した図(太実線は、わらべうた)

2-1. 「お気に入りの遊び」のエピソード記述

【エピソード No.2 「お気に入りの遊び」

20XX年7月27日 9時20分頃～ 約10分間】

〈背景〉

「わらべうたへの反応」のエピソードがきっかけとなり、私は、7月からゆうみの受け入れをさせてもらえるよう、えみに頼んだ。そして

受け入れからお昼ご飯まで、ゆうみと関わるようになった。

このころの私は、2つの変化を感じていた。1つはゆうみの表情がはっきりしてきたようになったこと。もう1つは、他の保育者のゆうみへの関わり方の変化である。ゆうみに対しても他の子と同様に、抱っこして泣き止まそうとしたり、おもちゃと一緒に遊ぼうとしたりする姿が見られるようになってきたのである。私がゆうみに注目していることが、他の保育者たちにもわかり、何らかの影響を与えたのだろう。保育者たちの関わりが変わったこともあり、ゆうみは随分園生活に慣れたようで、私以外の保育者やお部屋の子どもたちの前でも、生き生きと遊ぶ姿が見られるようになった。この日は他の保育者がゆうみの受け入れをし、私がゆうみと関わったのは、おやつの後からだ。

〈観察対象〉

ゆうみ(女児) かずや(男児) はるか(女児)

えみ(担任) ひろか(担任) 私(補助保育者)

〈エピソード〉

ゆうみはおやつが終わると、私のところにお手玉の入ったトレイを持ってきて、餅つきのまねをしてみせた。私はすぐに、前日、ゆうみとこのお手玉をお餅に見立てて「ペッター ペッター」のうたで遊んでいたことを思い出した。昨日のことを覚えていて、ゆうみが自分から積極的にわらべうたをしようと誘ってくれたことが、私にはとてもうれしかった。「ペッター ペッター」をうたってから、最後にゆうみの頭にお手玉をのせると、ゆうみはお辞儀をしてお手玉を落とす。それを私が取るという遊びを、何度も繰り返した。はじめのうちゆうみは、落ちたお手玉を私が掴むとにっこり笑っていたが、何度も繰り返すうちに、「きゃー」と笑って口に手を持っていき、喜びを爆発させるようになった。いつの間にか、私たちのまわりにかずややはるかも来ていた。はるかはそんなゆうみの頭を、かわいいというようになってた。もう一度うたって頭にのせると、ゆうみが落とす前に、はるかがゆうみのお手玉を手ではたいて落とす。それでも喜んで、さっきよりも大きな声で笑い声を上げるゆうみだった。

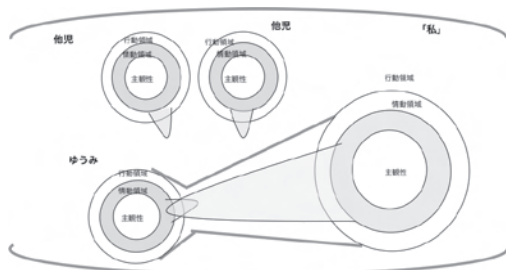
その様子を見ていた担任のえみやひろかも、一緒になって笑った。えみは、「すぐくじょうずよ、ゆうちゃん。遠くからでも目が合うようになったしね。」と、ゆうみの変化を話した。ひろかも、「昨日の帰りも、お母さんが来た

きにお手玉を持ってきて、頭にのせようとしていたんですよ。このうたのことだったんだね、ゆうちゃん」と言った。その後もゆうみとの「ペッター ペッタン」は、他の子も入れ替わり立ち替わり参加しながら、10分ほど続いた。
〈メタ観察〉

私は、ゆうみが「ぺったらぺったん」を催促してくれたことが嬉しくて、わらべうたをうたいかけた。ゆうみは自分に対して私が応えてくれたことが、嬉しかったのだろう。何度も繰り返すうちに、どんどん喜びを膨らませていった。それは私とゆうみだけに留まらず、お部屋の遊びの雰囲気まで作っていったのである。

2-2. 分析と考察

ゆうみは自らお手玉を持ってきて、「私」にわらべうたを催促した。その思いにこたえるように、「私」はわらべうたをうたいかけ、その「私」のわらべうたに、ゆうみは喜びを爆発させたのである。つまりゆうみには、「私」とわらべうたであそびたいという「私」への志向性と、それを表現する身体性があったと思われる。そして「私」とのわらべうたは、互いの応答性によって呼応するように繰り返して続いた。そんな「私」には、ゆうみの欲求を受け止める志向性や、ゆうみの成長を肌で感じる身体性と共に、ゆうみの成長を自分の喜びと感じるような養護性が現れている（図2）。母以外の人への関心が薄く、快情動の表出が少なかったとは思えないほどである。



ゆうみ：志向性・身体性・応答性

私：志向性・身体性・応答性・養護性

図2 「ぺったらぺったん」をうたっていたとき

3-1. 「あかんべー」のエピソード記述

【エピソード No.3 「あかんべー」

20XX年8月22日 10時頃～ 約10分間】

〈背景〉

この日はお盆休みの後、2日登園してまた土日でお休みの後の月曜日だった。だいたい園生活にも慣れてきて、登園時に涙が出ることもなくなっていた。

〈観察対象〉

ゆうみ（女兒） なな（女兒） あすか（女兒）
じゅんや（男児） えみ（担任） 私（補助保育者）
〈エピソード〉

ゆうみが登園してくるのが見えた私は、一緒に「ペッター ペッタン」で遊んでいたななに、「ゆうちゃんがきたよ」と声をかけた。ななは、私と一緒にいるゆうみとも一緒に過ごすことが多く、日頃からゆうみにおもちゃを渡してあげるなど、親しみのある態度を示してくれていた。ゆうみもこちらに来ていっしょに遊んでくれたらいいな…という気持ちで、私はななと遊び続けていた。

部屋に入ってくると、ゆうみは手にゼリーの透明カップを持っていた。それで遊ぼうと思って持ってきたのかもしれない。以前持ってきていたものは人形やマグマグ等、ゆうみにとっての安心材料である印象だった。けれど、今日は遊ぶものを持ってきている。園は楽しいことをするところだというイメージが、ついてきたのかもしれないと思った。

着替え用のカゴを置きに行っている母を、陰から見ているゆうみに「ゆうちゃん、おはよう」と声をかけてみた。お母さんとはなれたくなくて、嫌な顔をされるかなと思ったら、にやーっとした笑い顔を見せてくれた。今日は遊ぶ気持ちで来ているということが、表情からもわかった。母がゆうみの近くに返ってきて、「いってくるよ」というと、ゆうみは母にすがりつくように嫌がった。それを見たえみが、「ゆうちゃんおいで」というと、なんとゆうみはあかんべーをしてみせた。あんまり見事なあかんべーだったので、おかしいくらいだった。母は困ったような顔をしたが、ゆうみもそれ以上抵抗しなかったので、そのまま出て行った。えみも、ゆうみにあえて近寄らなかった。ゆうみはその場に1人たたずんでいた。

ちょうど私には背を向ける格好だったけれど、私はゆうみに「ゆうちゃん、やろうよ」といってお手玉を差し出し、ゆうみが机においていた自前のカップの中に、お手玉を入れた。それを見たゆうみの目は、うれしそうにキラキラし始め、笑顔を見せながらこちらにきた。そし

て、ななとゆうみ、じゅんやと一緒に「ペッタラ ペッタン」をうたって遊んだ。しばらく遊ぶと満足したのか、ゆうみは自然とままごとキッチンの方に行き、包丁を持って遊び始めた。遊びながらも、私が見ているか確認するように、時折こちらを振り向いていた。

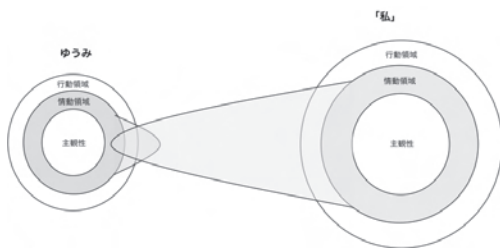
〈メタ観察〉

ゆうみは、登園直後であっても私に笑顔を見せる等、すっかり私に心を開いているように感じていた。私には、ゆうみのことを分かってあげられるというような自信があり、だからこそ、えみに対してあかんべーをしたことをおかしく思えたのだろう。ゆうみが遊びたいという思いで家からカップを持ってきたことが分かっていてからこそ、カップにゆうみのお気に入りのわらべうたの象徴であるお手玉を入れたのである。

3-2. 分析と考察

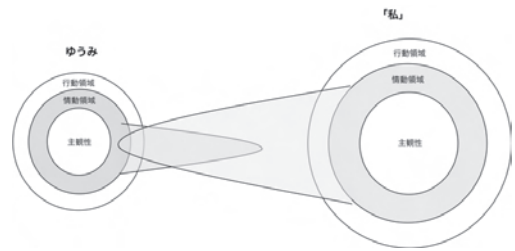
この頃の「私」は、わらべうたをうたう前からすでに、ゆうみのことが分かると思っていた。つまり、「私」はゆうみと、間主観的に繋がり合うことが容易になっていたのである。「私」には、離れていてもゆうみを感じ取り共にあろうとするとする身体性と志向性、ゆうみの意志に心から応えようとする共感性、1人でたずむゆうみへの養護性がすでにあつたのである。そしてゆうみにも、「私」を志向し、それを笑顔や目の輝きで表現するという志向性や身体性がすぐに現れた。そして、「私」のわらべうたへの誘いを感じ取り、ゆうみ自身もやりたいと心から思うような共感性も、そこにはあつた(図3-1)。そしてうたい始めると、友だちをも巻き込みながら、互いの応答性が現れたのではないかと考えられる(図3-2)。

しかし、こうした間主観的なつながりの容易さや、快情動の共有経験は、ゆうみに「私」へのこだわりを生む結果となってしまった。担任



ゆうみ：志向性・身体性・共感性
私：志向性・身体性・共感性・養護性

図3-1 「ペッタラ ペッタン」をする前



ゆうみ：志向性・身体性・応答性・共感性
私：志向性・身体性・応答性・共感性・養護性

図3-2 「ペッタラ ペッタン」をしているとき

であるえみには、あかんべーで拒否の態度を示していることから、それがうかがえる。「私」へのこだわりがこれ以上続けば、ゆるやかな担当制にしているこの園の乳児保育にも、悪影響を及ぼす可能性がある。わらべうたが、快情動の共有がしやすく、愛着を生みやすいうたであるならばなおさら、保育者同士が連携をとる必要があるだろう。

4-1. 「共感性の高さ」のエピソード記述

【No.4 共感性の高さ

20XX年10月13日 10時頃～ 約5分間】

〈背景〉

みんなと一緒に戸外に出る時には、自分の帽子や靴はもちろんのこと、他の子の帽子や靴も取ってきて渡すようになったゆうみ。その時にも、友だちの顔を覗き込むような仕草を見せ、「どうぞ」と言うような声まで出している。母以外の人への興味が薄いという相談があつたとは思えないほどである。私のことも「おかあさん」と呼んで、一緒に遊びたい気持ちを示すようになっていた。この頃は、私とななの3人で一緒に過ごすことがとても多かった。

〈観察対象〉

ゆうみ(女兒) なな(女兒) 私(補助保育者)
〈エピソード〉

砂場でななと私、ゆうみの3人で遊んでいた時、ななが思いがけず転んでしまった。私はななを抱きおこしたが、ななは泣いていた。するとゆうみがななに寄り添い、ななの肩を軽くぼんぼんと叩いていた。言葉は出ていなかったが、「よしよし」と言っているようだった。するとななも泣きやみ、ゆうみの顔をじっと見た。ゆうみは、そんなななの顔に、指を持っていった。そしてななの鼻の先を軽く叩き始めた。鼻、ほっぺ、口の順で、2回ずつ叩いて拍を取っている。

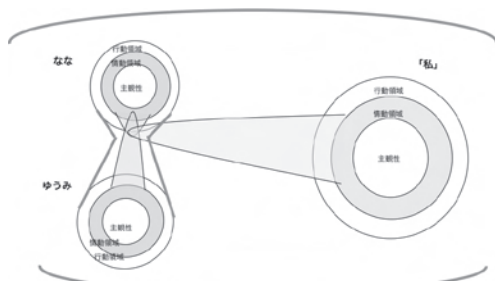
声にはなっていないけれど、「はなちゃん りんごが たべたいね」のうたをうたっているということは、すぐにわかった。ななもわかったのか、じっとされるがままにしていた。そして最後におでこを2回、ポンポンと軽く叩くと、ゆうみは「あははは」とわらった。ななもそれにつられて「ははは」と、ゆうみと顔を見合わせて笑った。私はこのとき、ゆうみがしたことがなんだったのかを知った。それは私が、いつもゆうみにしてあげていることだった。ななの痛いという気持ちがゆうみにもわかったから、ゆうみはわらべうたをうたったのだろう。悲しい気持ちを吹き飛ばすための手段として、ななのためにわらべうたをうたってあげているゆうみ。ゆうみは、わらべうたがななの気持ちを癒し、また一緒に遊べるようにしてくれるということを知っているのだ、と私は思った。

〈メタ観察〉

ゆうみは、ななに対していつも私がしているようなやり方で、ななを慰めた。それは、ななの気持ちがゆうみに伝わったからに他ならない。だからこそ、ななに対して慰めようとする気持ちがわいたのだろう。その場にいた私にも、ゆうみのそんな気持ちが伝わってきた、2人のことが微笑ましく、温かい気持ちになった。

4-2. 分析と考察

ゆうみがななに対して声には出さずとも「はなちゃん りんごが」のわらべうたをうたっていたのは、ななの痛みがゆうみにも伝わってきたからであろう。ゆうみのこうした共感性は、元々持っていたものなのかもしれないが、それを現す手段としてのわらべうたがあったからこそ、ここに現れたのである。つまり、わらべう



ゆうみ：志向性・身体性・応答性・共感性・養護性
私：志向性・身体性・応答性・共感性・養護性

図4 ゆうみがななに「はなちゃん りんごが」をうたいかけたとき

たによる関わりが、ゆうみの身体性を開いているのである。そばにいた「私」にもゆうみのななへの思いが伝わってきたからこそ、温かい気持ちになったと言えるだろう（図4）。

総合考察

ゆうみのエピソード記述からは、快情動を表出するようなわらべうたを普段からうたいかけるようにしたことが、他者関係や情動調整の発達を促し、豊かな共感性や養護性まで現すようになったことが読み取れる。

ゆうみは、わらべうたによって身体性が他者関係に開かれ、豊かな身体性を伴った応答性や、「私」への志向性が現れるようになった（エピソードNo.2）。それがやがて、他者への共感性や（エピソードNo.3）、自分よりも小さな子に対する養護性へと繋がっていったと考えられる（エピソードNo.4）。

またどのエピソードにおいても、わらべうたをうたう「私」には、ゆうみへの志向性・身体性・養護性が現れていた。つまり「私」の、ゆうみへの志向性・身体性・養護性が含まれたわらべうたが、ゆうみの志向性・身体性・応答性を引き出し、ゆうみの情動調整や他者関係（共感性・養護性）の発達に結びついていったと考えられるのである。

もちろんそういった発達が、わらべうたをうたいかけたことだけによる効果だとは言い切れない。他の保育者たちの関わり方が変化したこともあるだろう。しかし、わらべうたによる関わりを増やした短期間で、大きな変化があったことは事実である。保育者たちの意識が変わったきっかけになったのも、「私」のわらべうたによる、ゆうみの変化が1つのきっかけであった。

今回のエピソードをもって直ちに、志向性・身体性・養護性が含まれたわらべうたをうたいかけることによって快情動を表出することが、すべての乳児の情動調整や他者関係の発達を促すとは言いがたい。しかしゆうみの母親の、4月と10月の連絡帳の記述（資料1, 2）を読むと、ゆうみに対してこのような関わりをしたことの意義はあったと考えられる。すなわち、ゆうみに起きたことが、他の乳児にも起こる可能性はあると考えられるのである。

このように、情動調整や他者関係の発達が見られたゆうみだが、「私」へのこだわりが現れ

表1 わらべうたをうたっていた時に現れたもの

No.	ゆうみ	「私」
1	身体性	志向性・身体性 養護性
2	志向性・身体性 応答性	志向性・身体性 応答性・養護性
3-2	志向性・身体性 応答性・共感性	志向性・身体性 応答性・共感性 養護性
4	志向性・身体性 応答性・共感性 養護性	志向性・身体性 応答性・共感性 養護性

資料1 4月の連絡帳の記述

相談の結果、やはりコミュニケーションをとることが苦手で少しこだわりがあるなど、少し自閉症スペクトラムの特徴があるようです。
相談員の先生からは、今までは同じ接し方で良いとのこと、病院や支援といった事は現在必要ないとおっしゃられていました。平均より少し個性が強いとのこと。
成長過程でコミュニケーション能力を伸ばすべく、本人の辛や悩み、日常生活に支障をきたしたり集団生活、他の園児さんへ迷惑をお掛けすることがあれば、再度相談し、必要な支援を要するということになりました。
これからこの迷惑をお掛けすることが多くなるかと思いき、今後もしっかり向き合っていきます。

資料2 10月の連絡帳の記述

今回も丁寧な書類を作っていたいただき、ありがとうございます。相談は引き続きお話ししたところ、前回心配していた部分が改善しているとのことでした。終始笑顔であつたので、お部屋の中ではしゃぐ姿を見て(家ではお判りかたは、いはいはい)園の中ではこんな風にはしゃいでいるのかなと微笑ましい場面もありました。来年度の3歳児保育会まで継続したいとの事。

※連絡帳の論文掲載に関しては、ゆうみの母から許可を得ている。

たことも事実であった。エピソードNo.3では、担任保育者に対してあかんべーをした後で、「私」のところにきている。このことからわらべうたは、間主観的なつながりや愛着形成にも影響を与えると考えられる。こうした影響があることを考慮して、保育者同士が連携しながらわらべうたを行う必要があるだろう。

またわらべうたは、まわりにいた子どもにも情動的な影響を与え(エピソードNo.1)、お部屋の遊びの雰囲気にも影響を与えることもある(エピソードNo.2)。その時の保育内容によっては、他児やクラス全体に悪影響を及ぼすことも考えられる。保育者は、こうしたことに配慮し、クラス全体を視野に入れながら保育者同士の連携をもとに、わらべうたの実践をする必要があるだろう。

引用文献

秋山治子 (2003) 「保育と音楽—乳児の音楽環境としての「わらべうた」の考察」『白梅学園短期大学紀要』 **39**, 69-88
 遠藤利彦 (2013) 『「情の理」情動の合理性をめぐる心理学的考究』 東京大学出版会 **16**
 加藤繁美 (2007) 『対話的保育カリキュラム上』 ひとなる書房
 金丸智美, 無藤隆 (2004) 「母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差」『発達心理学研究』 **15**(2), 183-194
 金丸智美, 無藤隆 (2006) 「情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達の变化」『発達心理学研究』 **17**(3), 219-129
 川上範夫 (2012) 『ウィニコットがひらく豊かな心理臨床—ほどよい関係性に基づく実践体験論』 明石書房 **213**, 242
 木村はるみ, 蔵田友子 『うたおう・あそぼう わらべうた—乳児・幼児・学童との関わり方』 株式会社雲母書房
 清永歌織, 片山美香 (2017) 「事例から見た乳児の『泣き』に対する保育士の理解と対応」『岡山大学教師教育開発センター紀要』 **7**, 107-116
 草信和代, 諏訪きぬ (2009) 「現代における保育者の専門性に関する一考察—子どもと響き合う保育者の身体知を求めて—」『保育学研究』 **47**(2), 82-91
 鯨岡峻 (1999) 『関係発達論の構築』 ミネルヴァ書房
 鯨岡峻 (2005) 『エピソード記述入門』 東京大

- 学出版会
- 鯨岡峻 (2006) 『ひとがひとをわかるということ
間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻 (2013) 『なぜエピソード記述なのか「接
面」の心理学のために』東京大学出版会
- 小泉文夫 (1986) 『子どもの遊びとうた わら
べうたは生きている』草思社
- 小山正 (2006) 「子どもと親への心理的サポー
トの基礎」『乳幼児臨床発達学の基礎 子
どもと親への心理的サポート』培風館1-5
- 厚生労働省 (2016) 「保育所保育指針改訂に関
する中間とりまとめ」
- 厚生労働省 (2012, 2013, 2014, 2015, 2016,
2017) 「保育所等関連状況とりまとめ」
- 坂上裕子 (1999) 「歩行開始期における情動制
御:問題解決場面における対処行動の発達」
『発達心理学研究』10(2), 99-109
- 佐々本清恵, 大方美香 (2016) 「乳児保育にお
ける保育者との関係性(Ⅱ) - 乳児の『泣く』
行為の内容分析 - 『大阪総合体育大学紀要』
11, 191-204
- 嶋田由美 (2016) 「わらべうた教育の歴史とこ
れから」『乳幼児の音楽表現赤ちゃんから
始まる音環境の創造』中央法規
- 須川久 (1975) 『日本の音楽教育の実践』鳩の
森書房59-252
- 須田治 (2017) 『感情への自然主義的アプローチ』
金子書房
- 園部三郎 (1975) 『下手でもいい音楽の好きな
子どもを』音楽之友社
- 長崎イク (2006) 「子どもの発達とわらべうた」
『常葉学園短期大学紀要』37, 57-64
- 中田基昭 (2013) 『子どもから学ぶ教育学』東
京大学出版
- 野澤祥子, 淀川裕美, 高橋翠, 遠藤利彦, 秋田
喜代美 (2016) 「乳児保育の質に関する研
究の動向と展望」『東京大学大学院教育学
研究科紀要』56, 399-419
- 星信子 (2003) 「感情制御と養育者による感情
の社会化」『子育ての発達心理学』同文書
52
- 本城屋勝 (1982) 『わらべうた研究ノート』無
明舎出版16-88
- 正代晴香 (2011) 「すべては子どもの姿から～わ
らべうたを通して学んだこと～」『季刊保
育問題研究会』24, 新読書109-112
- 森田祥子 (2004) 「乳幼児期の情動調整の発達
に関する研究の概要と展望 - 保育の場を視
野に入れた情動調整の発達の理解を目指し
て -」『東京大学大学院教育学研究科紀要』
44, 181-189
- 森野美央 (2012) 「乳幼児期における情動調整
研究の動向と展望」『比治山大学現代文化
学部紀要』19, 107-114
- やまだようこ (2010) 『ことばの前のことば
うたうコミュニケーション』新曜社

謝 辞

本研究に際し、ご協力いただきましたみなさまに、心よりお礼申し上げます。